

トピックス

江戸川区教室交流会迫る

5月19日は、江戸川区教室交流会が予定されております。多くの教室からたくさんの方が参加されるよう、この場を借りて、あらためてお誘い致します。

日時； 5月19日（日）10時～12時 （9時半受付開始）

場所； 北葛西コミュニティ会館

閑人閑話

ボストンテロ事件の深淵

平和の象徴ともいえる国際的なマラソンレースで衝撃的なテロが起きてしまいました。犠牲になられた方々に心からお悔やみ申し上げます。まだ動機や背景の解明には至っていませんが、犯人兄弟がチェチェン人であることから、この事件の背後に横たわる歴史の深淵を垣間見ることが出来ます。

黒海とカスピ海の間位置する、いわゆるコーカサス(カフカス)地方に紀元前の昔から住んでいたのがチェチェン人と呼ばれる民族です。地図で見るとよくわかりますが、ロシアとトルコとイランのはざまにあるような地域です。18世紀ぐらいにはイスラム教を信奉する民族国家でしたが、18世紀末から帝政ロシアが侵略してきます。必死に抵抗しましたが、強制的にロシアの版図に組み込まれてしまいます。

この地方で石油が産出されるようになったこともあり、1920年に帝政ロシアが倒れてスターリン率いるソビエト連邦が誕生したあとも、1922年に「チェチェン自治州」とはなったものの、さらに過酷な弾圧と支配が続きます。最大の悲劇は第2次世界大戦中の1944年に、チェチェン人の対独協力を怖れたスターリンによって民族まるごと！中央アジアへ強制移住させられて、多くの人が異郷の地で命を失ってしまったことです。（このときは沿海州に住む朝鮮族をはじめ、ソ連辺境部に住む少数民族、トルコ人、タタール人、カルムイク人なども同様なむごい仕打ちを受けました。）

第2次大戦が終わり、スターリンも死んだ後、1957年になって、ようやく元の故郷に帰ることが許され、「チェチェン・イングーシ自治共和国」が設立されました。しかし先鋭的なチェチェン人は一方的にソ連邦からの離脱独立を宣言し「チェチェン共和国」建国を宣言し、ソ連と鋭く対立しました。1991年にソ連邦が崩壊しロシア連邦となりましたが、対立はますます激化し、ロシア軍による数次の武力制圧と、それに対応する、チェチェン側によるモスクワなどでの数々のテロ事件の血の連鎖が続いてきた、というのがチェチェンの近代から現代にかけてのすさまじい抵抗の歴史です。

強硬派は殺されたり、海外への亡命を余儀なくされて、現在はソ連に協調的な穏健派が政権を握っているようですが、絶望的に追い詰められている強硬派がイスラム過激派と結びつつあるというのがこの事件の背後にあるとも言われています。

この事件、誤解を恐れず言えば“スターリンの蒔いた種をオバマが刈り取る羽目になった”ということ、あるいは“スターリンによって追い詰められたチェチェン人の怒りと憎しみが、時空を超えてボストンで爆弾となって破裂した”ともいえます。

仏教の教えでいえば「縁起」あるいは「因果」ということになりましょうか。すべての事象には必ず原因があり、そしてそれに基づく結果があるということですね。

それにしても、あの生き残ったひとり、弟の「ジョハル・ツアルナエフ」のまだあどけないような、そして聡明そうで、知的な風貌を我々はどのように受け止めたらいいのでしょうか？

本号から新たなテーマ「楊名時師家の名語録をひもとく」を連載することといたします。教室の皆さんもよくご承知のように、私たちが学んでいる“楊名時健康太極拳”は、今から53年前の1960年に故・楊名時師家が日本で普及活動を始められたものです。組織としてはまず1975年に「楊名時八段錦・太極拳友好会」が結成されましたが、その会報として発刊されたのが『太極』誌で、創刊は1977年9月30日でした。すぐに年4回の定期発行となり、現在の組織「日本健康太極拳協会」の会報として引き継がれ、今年5月に記念すべき第200号が発行されることとなりました。

この会報の「巻頭文」を通じて故・楊名時師家は数々の名言、名文を発信されております。たいへん含蓄に富んだ内容のものばかりですが、その一部を、今号から約1年かけて、ご紹介したいと思います。

【〈太極〉巻頭文集（楊名時著 中野完二編 2004年発刊）からの引用。引用箇所はすべて『』内に斜体で表示しました。】

その1 「鑑真和上像の招請と日中平和条約の調印」 (1978年10月 第3号)

1943年に留学生として来日以来34年ぶりに祖国中国を訪問したときの報告がこのときの巻頭文です。3週間で7都市を訪れておられますが、とくに鑑真和上のふるさと揚州を訪れた様子について、また鑑真の来日に至る苦難の道について詳しく述べられております。そして、この地で黄玉製の鑑真和上像に出会った様子について以下のように述べられておられます。

『揚州はまた、玉の工芸で有名なところである。……玉器工場に案内されたとき、玉製のすばらしい鑑真和上像が三体ほど飾られていた。……三体のうち、石の色、表情、全体的な雰囲気など、いろいろな意味で傑作であろうという一体を、……特別にとりかはらって護っていただけることになった。

玉は黄玉。産地は新疆のマラス。大きさは二二、三センチぐらいの高さ、たいへんな重さだ。少ない貴重な黄玉に加えて、三十数年のキャリアを持つ老芸術家が、深い心をこめて彫り上げたものだ。しかも、揚州以外では絶対に得られない。この像を大切に持ち帰った。というよりも日本に「招請」したというほうがいだろう。家宝というよりも太極拳の守り本尊にしてゆきたい。太極拳の中に鑑真和上の心を生かしたい。日中文化交流に命を懸けた強い信念を学びたい、と思う。……』

ということで、この鑑真和上像(右の画像)は現在協会本部(本部道場)の1階会議室の展示スペースに鎮座されています。機会があったら皆さんもぜひ一度ご覧になってください。



この巻頭文はさらに、旅行当時最終交渉段階にあった日中平和友好条約に触れ、旅行から帰国直後の8月12日にめでたく調印されたことについて、深い喜びとともに以下のように述べられておられます。

『私も日本において八段錦や太極拳を普及し、もって人々の体位向上、健康増進に役立ちたいと願い、また祖国の言葉、中国語を教えることにより、両国の友好を促進するうえにも何らかの役に立つことを願い、両国を結ぶ橋の役目が出来たらと願ってきただけに、まことに感慨深いものがある。……今後両国が、この条約を基に充実した内容の交流を推進して、経済、文化、科学技術、農業、工業、体育などあらゆる面の協力が互惠の立場に立って行われなければならない。もって、この一衣帯水の中日両国の友好が子子孫孫に至るまで永遠に続くことを切望したい。』

日中関係がきな臭い現在ですから、なおさらに、まことに重みのある記述であるとあらためて思い至りました。この一文は楊名時太極拳の掲げる“健康・友好・平和”のスローガンの原点ともいえる一文とし

て、あえて最初にご紹介した次第です。

旅をうたい拳を詠む

高遠・松本お花見紀行

長い間一度は行きたいと思っていた信州の「高遠」へようやく行くことが出来ました。4月11日に訪れた高遠城址公園【写真右】の、「天下第一の桜」と称せられているコヒガンザクラはちょうど満開でした！城址全体が薄紅色に染まって、東西に仰ぐ南アルプスと中央アルプスの白雪の峰々とのコントラストも見事でした。今はただの城址にすぎませんが、この高遠城には数々の歴史が秘められています。

戦国時代には武田家の進出や支配をめぐるいくつかの争いがあり、最後には、織田信長軍に攻められて武田勢の大將以下3000名の守備兵が全滅した、そしてこれから武田家の滅亡のドラマが始まった、という哀史が残されています。

江戸時代に入ってから第一のドラマは、二代将軍徳川秀忠の隠し子「幸松」が当時の高遠藩主保科正光に預けられ、やがて養子となり正光の後を継いで「保科正之」を名乗って高遠藩3万石の藩主となったことです。さらに、この異母兄の存在を好意的に受け入れた三代将軍家光は、まず山形藩20万石の藩主へと転封し、さらには東北経営の拠点である会津藩23万石の藩主、大大名へと引き立て、同時に徳川宗家への輔弼の役割を与えました。会津藩の爾後の繁栄と徳川幕府に対する忠誠は、ひとえにこの保科正之にかかるものと言えましょう。【写真左；城址から仰ぐ仙丈岳】



第二のドラマは、時代が下って、7代将軍家継のときに起きた絵島生島事件です。諸説はありますが、江戸城大奥の権力争いと風紀粛清の犠牲となったのが美貌の大年寄絵島でした。江戸城帰城の門限遅れと歌舞伎役者生島新五郎との仲を咎められての思わぬ流刑、61歳で亡くなるまでの28年間を、ここ高遠の牢獄のような“囲み屋敷”で送ったのでした。

明治5年には明治新政府の命令で城内の建造物は民間に払い下げられたり、壊されたりしてしまいました。旧藩士たちがその跡に桜を植えてきたものが現在こうして「日本の桜百景」に選ばれるほどの名所となったわけです。栄枯盛衰の数々の物語を知らぬがに、ただ桜は華やかに咲き盛っていました。

花の山花の雲また花の風高遠桜は天下第一
二組が狭いベンチを分けあって見知らぬ同士の花見の小宴
夜桜を見んと出で立つ鼻先きに春の淡雪降りかかるなり

花の山花の雲また花の風高遠桜は天下第一

二組が狭いベンチを分けあって見知らぬ同士の花見の小宴

夜桜を見んと出で立つ鼻先きに春の淡雪降りかかるなり

もろもろの哀史は知らず高遠のコヒガンザクラは艶冶に咲き満つ

虚と実は歴史の闇に埋もれて残るは絵島の綻びし夜着

今回の旅はまず中央線の特急あずさで茅野へ行き、そこから杖突峠を經由して高遠へ入り、城址公園でのお花見、隣に再現されている絵島囲み屋敷などを見て回りました。さいわい予約出来た街中にある小さ



なしかし気の利いた宿で一泊し、翌朝、再度城址公園に上がって、昼酒を楽しみながらのんびりとお花見のアンコール。午後バスで伊那市に出てJRで塩尻に出ました。

その日の宿はこれも大昔から一度泊まってみたくと念願していた松本市郊外鉢伏山山腹の一軒宿です。翌朝早朝6時ちょうど大浴場にとっぷり浸かったそのときに、それまで山を隠していた朝霧がまるで舞台の幕でも引くように消え去って、白銀に輝く北アルプスの峰々が目の前にずらっと頭ちあらわれました。【写真左】これこそが

この宿のウリなのです。これを見ることが出来ただけでも泊った甲斐があったというものです。

朝霧のにわかには晴れて白銀の穂高連峰まぶしく顕わる

穂高・槍・常念・燕・爺・五竜・唐松までものパノラマ展望

バスで松本駅に出て、久しぶりに松本城【写真右】を訪ねました。ここの桜もちょうど満開。鳥城の異名を持つ、文字通り黒塗りの下見板を各層に張り巡らせた五重天守閣は満開の桜を侍らせてひととき威容を放っていました。国宝に指定されているのもうなずけます。



松本駅から特急スーパーあずさに身を委ねて、途中、次々と現れる懐かしい山々を右左に眺めつつ、お弁当を開けワインと日本酒をちびちびやりながら新宿へと、2泊3日の旅のフィナーレを楽しみました。

銀嶺と満開桜従えて松本鳥城は黒さを誇る

帰り路は特急あずさに身をゆだね八ヶ岳と南アを肴に一献

ご案内！ 西尾忠久先生追悼「彩色・江戸名所図会」展示会

日時；5月25日（土）午後5時から6月1日（日）午後3時まで（開館時間は9時～22時）

場所；江東区・森下文化センター1階ロビー（メトロ森下駅または清澄白河駅から徒歩7分）

恒例の「彩色・江戸名所図会」展示会を今年も開催します。今回は、昨年亡くなられた西尾忠久先生（コピーライター・池波正太郎及び同作品研究家）追悼と題して、先生の遺作2点を含め「彩色・江戸名所図会」26点を展示いたします。小生も『日本橋』『清水堂花見図』（下図）の2作を出展します

主催； 大江戸熱愛倶楽部

